**降誕前第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年11月19日**

**「散らされた人々」**

**列王記上19章3～4節**

**19:3 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、**

 **19:4 彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」**

**使徒言行録8章1節b～8節**

 **8:1 その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。**

 **8:2 しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。**

 **8:3 一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。**

**8:4 さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。**

 **8:5 フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。**

 **8:6 群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に聞き入った。**

 **8:7 実際、汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの中風患者や足の不自由な人もいやしてもらった。**

 **8:8 町の人々は大変喜んだ。**

**昨日は午後から教会のあたりでも結構雪が降りました。時間的には1時間くらいだったでしょうか、そんなに長い時間ではなかったのですが、一時風も強く吹いて雪が舞い吹雪のようになりました。私は最初は「諏訪に来て初雪か～」という感じで珍しく見ていたのですが、なかなか降りやまないうえに屋根の上に雪が積もってくるのを見ていたら「明日の朝は雪かきかな。早くやまないかな」と思い始めました。幸い雪かきが必要なほどには降らなかったのですが、雪がやんでから教会の外に出ると、強い風で撒き散らされた落ち葉が玄関と駐車場のあちこちに落ちていました。明日の朝の雪かきは必要なくなったのですが、その代わりと言いますか落ち葉の掃除が結構大変かなと思いました。**

**まあでも考えてみますと、風で撒き散らされた落ち葉は玄関とか駐車場とか家の前とかに落ちるから掃除をしなければならない存在になるわけなのですが、掃除が必要ない野原とか草むらとか森とか林とか自然なところに落ちると大切な肥料になるわけです。「腐葉土」という土が園芸屋さんとかホームセンターで売っているくらいですから、落ち葉は園芸には欠かせない大切な栄養となって用いられます。強い風によって散らされた落ち葉を見ていると、私は今日の聖書箇所に繋がってくるものがあるなと思いました。強い風で散らされた葉っぱと何か大きな力で散らされた人々と共通するものがあるように思うのです。**

**先週私たちはステファノがキリスト教会最初の殉教者となったところから共に御言葉を聞きました。最期の最期までステファノは自分に石を投げつけるユダヤ人たちの罪の赦しをイエス様に祈り願いました。「主よこの罪を彼らに負わせないでください。」そのステファノの姿を見たサウロは何か感じるものがあったに違いありません。**

**ユダヤ人指導者たちはステファノの殺害を機に、それまで抱いていた日頃のキリスト教会への憎しみを爆発させました。最初の教会であるエルサレム教会そのものを大迫害しました。**

**使徒たち以外はユダヤとサマリアの地方に逃げざるを得ませんでした。エルサレムに残ったわずかな人たちでステファノを葬りました。そして、なおも続く教会への大迫害でありますが、その中にステファノの最期を見たサウロがいました。彼は教会を荒らしました。それだけでなく、教会の信徒の家に押し入り男女を問わず引き出して牢に送りました。この教会を「荒らし」の荒らすは元の言葉では「滅ぼす」という非常に強い意味を持つ言葉です。教会を滅ぼす、徹底的に叩き潰そうとするのです。それはまるでサウロの脳裏を離れないステファノの姿を滅ぼし徹底的に叩きのめそうとするかのようであります。**

**ペンテコステに誕生した教会はペトロとヨハネが教会の外で福音を語ることを禁じられたり、アナニアとサフィラの事件という教会の中の事件はあり、問題を抱えながらも成長を続けていました。多くの人が教会の仲間に加わり、キリスト教に好意を持ってみてくれる人たちも生まれてきました。ですから教会がここまでの大迫害を受けたのはこれが初めてです。教会誕生以来最初の大迫害によって、エルサレムから多くの人がユダヤとサマリアに散るという大きなピンチに見舞われました。万事休す。もはやこれまでかと思った教会の人たちもいたでしょう。**

　**しかし4節に驚くことが記されているのです。**

**「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。」**

**ユダヤとサマリアに散っていった教会の人々はなんと福音を告げ知らせながら巡り歩いたのです。教会が大迫害に会い命からがら逃げているのです。普通に考えれば隠れキリシタンではないですが、自分がキリスト者であることを隠してひっそりと逃げるでしょう。そうしないと命を狙われかねないからです。素性を隠し、イエス様を信じていることを隠して、その町でひっそりと暮らすと思います。しかし、彼らはそうではないのです。堂々とイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えながら巡り歩いたのです。自分がキリスト者であることをはっきり示して福音を宣べ伝えて伝道をして歩いたのです。**

**その中の一人がフィリポです。彼はステファノと一緒に教会の世話役の7人に選ばれたメンバーです。フィリポが逃げた先のサマリアで伝道をし、汚れた霊を追い出し、病や障害を癒す働きをしました。その結果サマリアの町の人々から大いに喜ばれたのでした。歴史的にユダヤ人とサマリア人は決して良好な関係ではないのですが、サマリア人はユダヤ人のフィリポを喜んで受け入れたのです。**

**こうして、ユダヤ人からすると異邦人の地、サマリアに福音が広がりました。それは、教会の迫害という危機にあって、むしろその危機をチャンスにして福音を伝える伝道の業が広がっていったのです。ピンチをチャンスに変える、転んでもただでは起きない、そんな一言では表現できない何か大きなものを感じずにはいられません。**

**私たちは今日の御言葉の1節と4節に「散っていった」という言葉が使われていることに注目をしたいと思います。「ユダヤとサマリア地方に散って行った」「さて、散って行った人々は」とあります。「散って行った」と聞くと何か自分の力で散った、逃げたかのように感じてしまいます。けれどもここは聖書の元々の言葉では「散らされる」という受動態になっています。受け身の形です。自分たちの意思ではなくて、何かによって散らされていったのです。何か自分たちの意思を超える大きな力に「散らされた」のです。いったい何によって「散らされた」のでしょうか。**

**使徒言行録1：8(213頁)で天に上げられるイエス様が使徒たちに語られた言葉としてこのように記されています。**

**「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」**

**イエス様は言われるのです。ユダヤとサマリアの全土で、わたしの証人となる。ユダヤ**

**とサマリアの全土です。そして教会の大迫害で教会の人々が「散らされた」のもユダヤとサマリアの地方です（1節）。これは偶然散らされた場所が重なったということではありません。ユダヤとサマリアに「散らされた」、誰に何によって散らされたかというと、他でもない神様によって散らされて福音を宣べ伝えイエス・キリストの証人になったのです。**

**ですから「散らされた」ということは神様によって伝道のために「遣わされた」ということなのです。ユダヤとサマリアに遣わされて、その場所でイエスキリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えて巡り歩いたのです。神様から散らされ遣わされた人々によって、ユダヤ人伝道だけでなく、全く思いもかけない形でサマリアなどの異邦人伝道へと福音は広がっていくのです。さらには、全世界へ、地の果てに至るまで、福音が広がっていくのです。それは自分たちの意思ではなくて、神様の御意志によって「散らされる」ことによって福音が広がっていくのです。**

**吹雪と言う強い風で散らされた落ち葉が思いがけずどこかの場所に落ちて、それがいつの日か肥料となって豊かに用いられることと、神様によって散らされて遣わされて、そしてその散らされて遣わされた場所で福音を宣べ伝えて神様に豊かに用いられる、その姿が重なるのです。自分の意志や自分の力ではなくて、自分をはるかに超える大きな力によって散らされて遣わされて、それぞれの場所で豊かに用いられるのです。**

**それは私たちも同じなのです。今ここにいるのが私たち自分の思いではなく、何か神様の導きで思いがけない形で今ここに散らされて遣わされて諏訪教会に繋がり、神様を礼拝している方がおられると思います。いや私は自分の意志でここに来たのだという方もおられるでしょうが、よくよく考えたら自分の意志をはるかに超える神様の導きが必ずあると思います。中には今この散らされた場所遣わされた場所が納得がいかない方もおられるでしょう。「こんなはずじゃあなかったのに」と思われている方もおられるかもしれません。でも、そこにも神様の御心があり、そこにもちゃんと意味があるのです。ちゃんと用いられるのです。たとえそれが今はわからなくても、後々であの時の自分には必要な場であり必要な時であったと気づく時が来るのです。ですから私たち皆が何らかの形で神様によって散らされて遣わされて、その散らされた遣わされた場所で神様に豊かに用いられているのです。私たちの思いをはるかに超える神様の導きに感謝をして、それぞれの置かれた場所で十字架と復活の福音を宣べ伝えていき、愛の業に励んでいきましょう。**